老人ホームに入って一年

大平　忠

夫婦で老人ホームに入ってほぼ一年が経った。入居して三ヶ月ほどは引っ越し疲れで家内ともども足腰が痛んで病院通いをした。普通の引越しと異なり、断捨離作業が思いのほか大変だった。もっと早く始めるべきだったと後悔している。

老人ホームは、住居型老人ホームで、入居者は約百三十名である。夫婦ものは二十組、男性約四十名女性約九十名でやはり女性が多い。平均年齢は八十二、三才だが、女性の方が一、二才上のようだ。

老人ホームに入ってまず感じたのは、二人の子供たちが安心したことである。そして私たちは子供達に心配をかけないという安心を得たことであった。十年前に、横浜から福岡へやってきたのは、子供のそばに行くことによって、私たちも子供たちも安心するという理由だった。当時は二人は七十八と七十四だった。それから十年経つと今度は介護の問題が目前となり、この齢での老老介護は無理だということが分かってきた。また、二人が元気なうちに引っ越さないと引っ越しもできなくなるという不安もあった。

さて、老人ホームについての感想だが、予想していたより居心地はいい。老人ホームに入っているある友人は周囲が年寄りばかりで寂しいと言う。しかし、私たちは平均年齢よりも上のせいか、そんな感じはしない。人間関係を心配していたが、厄介な関係は皆無である。何より助かるのは、強制されることが全くないことである。食事も予約なしで自由。ラジオ体操始め各種の体操も希望者だけ。行事も自由参加である。

いざ、身体に緊急の異変が起こった場合のことである。

部屋には、緊急連絡のボタンや紐が、風呂場、トイレ、居間、枕元に設置されている。さらに十二時間人の動きが感知されない時には職員がやってきてチェックしてくれるそうである。独り住まいの場合の一番の心配をしなくていいから助かる。

家内と二人、今後はともかく自立できている今のところは老人ホームに入ってよかったと思っている。

（二〇二六年　五月十四日）